

# 石狩浜漂着物考古学ノート 1

## 石狩浜の漂着遺物とその履歴

Ishikari Beach driftage archeology note 1  
Drifted relics on Iishikari Beach and their origins

石橋 孝夫\*  
Takao ISHIBASHI\*

キーワード：石狩浜，漂着物，ココヤシ，コハク，加工銭

### はじめに

石狩浜は石狩市本町地区西側にある砂浜である。この浜一帯は近年、季節毎に漂着物を探すビーチコーマーでにぎわっている。ここ数年、筆者もこの浜を中心にしてビーチコーミングを熱心に行っている。採取エリアは図示したように概ね石狩浜海水浴場から石狩川左岸河口まで、期間は3月末から12月（根雪前まで）で木曜日から土曜日を中心に歩き調査をしている。

この浜でみられる漂着物は人工品、自然由来とさまざまであるが、浜の北側に石狩川河口があり、海だけでなく流域から流れ漂着する例も多い。

筆者の専門は考古学であるが、この浜の漂着物のなかには専門に直接関係する遺物あるいは地域の歴史の理解あるいは解釈するために有効な資料となるものが存在する。筆者はこれらを「漂着遺物」と仮称している。例として土器片・石器をはじめ、ココヤシ、コハク、陶磁器などがあげられる。

本稿ではこの「漂着遺物」の中からいくつかを取上げて、所見を述べることにする。今回取上げる「漂着遺物」はココヤシ、石炭、コハク、アスファルト、白樺浮き、銭貨、陶磁器である。なお、陶磁器については「漂着物考古学ノート2」

として木戸奈央子さんと共著で別稿に掲載した。

### 石狩浜の付近の地形と歴史

図1は筆者の調査範囲と石狩浜付近の地形を示したものである。石狩浜は石狩川と石狩湾（日本海）にはさまれた細長い地形と砂嘴の西側にある砂浜である。浜は現在、汀線から概ね10mから50mの幅があり、標高は2.5mから1mほどあり現生砂丘である石狩砂丘へ続く。

石狩砂丘は標高10m前後で6～7列からなる砂丘列で海側の3列はハマナス群落に覆われ、内陸側の3～4列はカシワ林に覆われている（垣見、

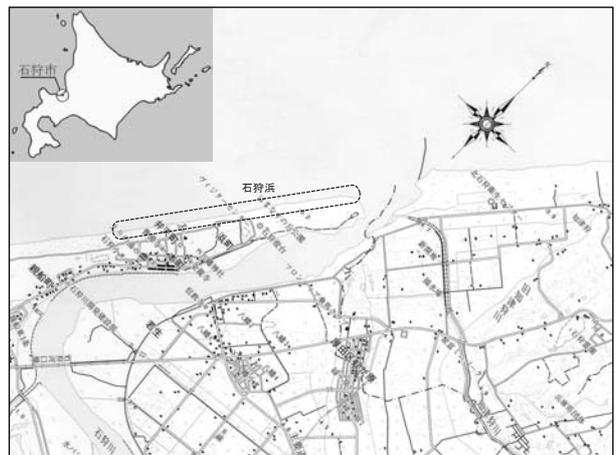


図1. 漂着遺物採取範囲（国土地理院5万分の1地形図に加筆）。

\*いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

1958) .

海側の砂丘と内陸側の砂丘の間には小樽市銭函に通じる「石狩樽川海岸線」が海岸に平行してあるが、これは江戸時代末の旧道でもある。当時、道は汀線に面していたと考えられ、この道より海側の地形は幕末以降に形成されたと考えられる。

石狩砂丘より内陸側には石狩本町地区があるが、前掲、垣見によると「花畔海浜堆積物」がある。同じ堆積物が分布する石狩川左岸上流部（現石狩河口橋付近）および同右岸には縄文文化から擦文文化（西暦10世紀ごろ）の遺跡があるが、ここでは見つかっていない。このことからこの地区の地形形成は石狩川右岸よりも若干新しいと考えられる。

石狩本町地区の歴史は慶長年間（1596-1615）にまで遡るともいわれている（石狩町，1972）。しかし、その当時の様相は明らかでない。本格的な市街地形成は安政年間に入ってからと思われる。石狩町誌（石狩町，1972）によると安政5（1859）年ごろには100戸程度の町になっていたといわれる。別稿で述べるとおり、漂着陶磁器の時期は幕末期が中心であり、石狩市本町地区の本格的な市街地形成期と一致している。

また、この地区の北端にある石狩八幡神社から北側は砂嘴で、文化10（1813）年以降から昭和47（1972）年の間に形成されたものである。この地形の発達過程については近年、石川治（2013）の研究がある。砂嘴の形成は石狩川が排出する土砂や日本海により打ち寄せられる波などの営力によるものである。

石狩川は年により異なるが年間の浮遊土砂の排出量は150～200万m<sup>3</sup>、掃流土砂量は1～3万m<sup>3</sup>に及ぶともいわれており、運搬された土砂等は粒径の細かいものは石狩浜や湾内だけでなく、遠くは積丹沖、留萌沖まで到達するという（大嶋・横田，1978）。

濱田・菅（1998）によれば1980年代以降石狩浜付近の砂浜は浸食に転じ、季節ごとの海岸線変化は「現在の海岸線形成には冬期の波浪の影響が大きい」とされる。なお、漂着物の季節的な傾向は

夏期が少なく、秋から冬から春先にかけて増加する。

## 漂着遺物とその所見

### （1）ココヤシ（*Cocos nucifera*）

#### （1）-1. 石狩浜のココヤシの漂着と出土例

石狩浜ではココヤシの実が漂着する。石狩市域全体では石狩湾新港，石狩浜，厚田区望来海岸，厚田海水浴場，浜益区柏木海水浴場などの漂着例がある。

また全道的には天塩町を北限にオホーツク沿岸を除く北海道沿岸に漂着することが知られている（図2）。

ココヤシは本来、日本列島内では自生せず本来、南北回帰線の間が分布する植物だといわれている（杉村・松井，1998）。

この実が国内に漂着するのは近世以前から知られている。『和漢三才図会』（島田勇雄ほか，1994）に『本草項目』の引用で「椰子（やしお）」として記載がある。これには産地についても記載があり、産地は「嶺南」（ベトナム北部）と記載され、殻は容器などに加工されたという。

石狩浜の場合、実は自生地から対馬暖流により北上して石狩湾に流入し漂着するものと思われる。図のとおり、この実は部厚い繊維質の中果皮におおわれて浮力が大きいいため長時間の漂流に耐えることが知られており、果実の漂流散布の代表例である（図3）。

愛知県田原市では昭和63（1988）年から島崎藤村の「椰子の実」の歌にちなんで石垣島沖から標識付きのココヤシを流す「やしの実投流事業」を行っているが、これまで日本海側での最北の漂着例は山形県であるという（篠宮，2009）。

北海道では遺跡からの出土例はないが、本州では関東以西の遺跡から出土する。時代的には縄文時代前期から弥生時代までの遺跡での出土例があり、容器などに加工され使用されている（篠宮，2009；奈良市埋蔵文化財センター，2003）。特殊な例としては長崎県原の辻遺跡の吹鳴楽器（笛）

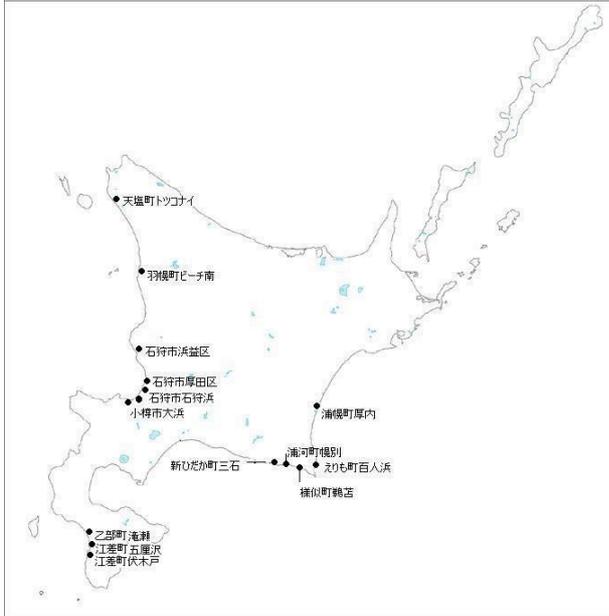


図2. 北海道内のココヤシ漂着分布図（北海道大漂着物展図録（hyoutyakubututen, 2009）に加筆）.

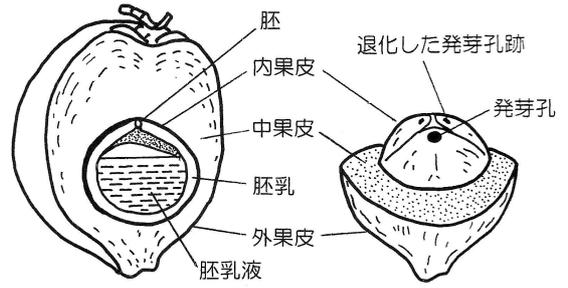


図3. ココヤシ果実の形態と名称（杉村・松井, 1998）.



図4. 石狩浜に漂着したココヤシ.

図5. ココヤシ内部に穿孔した二枚貝.

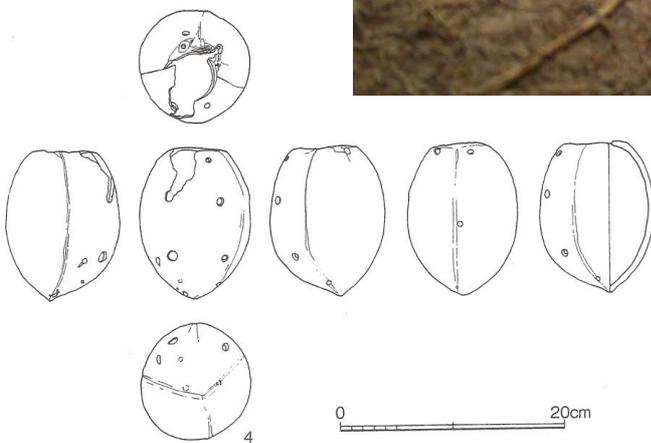


図6. ココヤシ製笛（町田, 2005）.



図7. 内果皮表面に観察された円形の生痕.

に加工された2点の実がある（福田・中尾，2005）。

ココヤシが遺跡から出土した例は縄文時代では福井県鳥浜貝塚，千葉県粟島台遺跡，弥生時代では滋賀県下之郷遺跡，兵庫県玉津田中遺跡，島根県西川遺跡，福岡県比恵遺跡，長崎県里田原遺跡，同県原の辻遺跡，奈良時代では平城京跡（左京八条二坊五坪）の9遺跡があり，いずれも漂着したものを採取したと考えられる。

#### (1)-2. 採取されたココヤシの特徴

2012年は市内の浜に多数のココヤシが漂着した。同僚学芸員の教示や漂着情報を総合すると10個以上の実が漂着したものとみられる。筆者も4個採取したが，このうちの3個は石狩浜で採取した。

とくに2012年10月25日石狩浜採取の1個には外果皮表面に無数の小孔が観察された（図4）。実の大きさは外果皮の最大長が22.5cm，内果皮では最大長が13.0cmあり，小孔は径が1cm前後ある（いずれも乾燥状態での計測値）。

小孔がなぜ開いているのか，また実の構造を詳しく観察する目的で，内果皮まで半割にしてみた（図5）。その結果以下のことがわかった。

- ①小孔は内果皮表面に達しており，内部には白色の貝殻がみられた。
- ②貝殻の存在から孔を開けたのは貝であり，孔は巣穴である。
- ③巣穴の底部には貝の穿孔活動によりできた円形の傷跡（生痕）があった。

また鈴木明彦氏の教示によるとこの貝はカモメガイモドキ (*Martesia striata*) という種類で，北海道以南に生息する（鈴木ほか，投稿中）。

近年，札幌市のスーパーなどでココヤシの実が販売されているが，この貝の存在からこの実が北海道以南から漂流してきたことが証明される。

#### (1)-3. ココヤシ製笛と穿孔貝の生痕の類似

すでに例示したが遺跡から出土したココヤシの実の特異な利用例としてココヤシ製笛がある。こ

の笛といわれるものは内果皮（殻）にある発芽孔を利用して吹き口を作り，指孔といわれる複数の孔をもつものである。また，それ以外に未貫通のくぼみ状の円形の傷跡が存在するという（町田，2005）。

図6は2例のココヤシ製笛のうちの1個で，9か所の穿孔（指孔）と7か所のくぼみ「穿孔配置を意識した凹み」がみられるものである。

図上計測であるが指孔は直径1cm程度，「穿孔配置を意識した凹み」は直径5mm以上あるとみられ円形である。この凹みは石狩浜で筆者が採取した実の内果皮表面の円形の傷跡（穿孔貝の生痕，図7）に類似しているようにみえる。

実物との比較調査はおこなっていないが，ココヤシ製笛に使用された実も漂着ココヤシであり，未貫通の「穿孔配置を意識した凹み」あるいはもう1つの笛にみられる「虫食い状の小孔」とされる傷跡は，穿孔貝による巣穴底部にみられる傷跡（生痕）かもしれない。

ココヤシ製笛については異論もある。笠原潔（2004）によると，近藤直美氏はココヤシ製笛で指孔とされた5孔のうち2孔は発芽孔で残り3孔は「ランダムに開けられていて明確な設計意図に基づいて開けられたものとは思えない」「そもそも人工的にあけられた孔であるかどうかはつきりしない」とも指摘している。これが事実とすれば未貫通孔の存在も加味すると指孔とされる貫通孔ももとは穿孔貝の巣穴の生痕（傷跡）を利用した可能性もあろう。

実に残された痕跡は今後，この種の遺物が出土した場合の参考となる事例である。

## (2) 石炭とコハク

### (2)-1. 石炭

石狩浜には石炭とコハク，アスファルトが漂着する。このうち石炭はサイズが指先大から握りこぶし大のものまでであるが，時には30cm×20cmという大物もある（図8）。また石狩浜の砂には微小な石炭粒が無数に含まれている。

石炭は石狩浜ばかりでなく，厚田区無煙・望来

海岸でもみられる。厚田区での漂着石炭は『厚田村史』（谷内ほか、1969）で「厚田村（知津狩〜ムエン濱）に思わぬ海のサチ」と題され記載されている。これによると「昭和40年代、冬、海が荒れると大量の石炭が漂着し付近の住民は拾って備蓄して燃料として使用した」という。同様の例は小樽市銭函海岸でもあり、「銭函海浜炭」という名前もあったという。ここでは秋の大時化の際、数十トン単位の石炭の打ち上げがあったそうである（大島・横田、1978）。

さて、これらの石炭の供給源について、当時、石狩湾内での石炭運搬船座礁説や小樽港内からの流出などの説が流布されていた（谷内ほか、1969）。しかし、いずれの説も根拠に乏しく、実態は不明であった。

ところが近年、岡村聡ほか（2005）が石狩川河口から望来浜にかけて、「河原・海岸の小石調査」を行った結果、漂着石炭は海岸から50km以上上流の幾春別川、幌向川、夕張川など東側流系に沿って広がる古第三紀始新世の石狩層群の石炭層から流れ出た可能性が高いことが明らかになった。

石炭が燃料などに利用されるのは明治時代からであるが、石狩市内の2遺跡から石炭を加工した玉が出土している。このことから先史時代の人々が早くから石炭を利用していた例といえる。この例は若生C遺跡の続縄文期の墓の副葬品のネックレスの玉の1つで、もう一例は発寒川上流の樽川D遺跡（続縄文期）で直径2.5cmの平玉が出土している。（石狩町誌、1972）

これらに使用された石炭は、当時石狩にいた人々がはるばる炭田まで採取しに行ったことを示しているのではなく、次に述べるコハクと同じく石狩川経由で流出し海岸に漂着した石炭を採取し加工した可能性が高い。

## (2)-2. コハク

石狩浜や厚田区望来の海岸ではしばしばコハクが採集される。望来の人で採集したコハクで数珠を作ったという話もある。

望来付近の漂着コハクについては、明治22年横山壮次郎（1889）により報告されている。それによると「厚田郡聚富村ト望来村の海瀬凡一里許間」に海藻の根に付着して指頭大のコハクがあることが述べられている。

しかし、石狩浜付近のコハクに関する記録はさらに古い安政4（1857）年にすでにある。その記録とは箱館奉行堀利熙の随行者の玉虫佐太夫の日誌『入北記』（玉虫、1992）である。これによると「此辺琥珀石多ク随従ノ者拾ヒ取り少シク旅困ヲ忘レタリ」と記載されており、内容から石狩〜銭函に至る道筋の海岸で漂着コハクを採取したものとみられる。

この付近で海岸に漂着するコハクの大きさについては、前記横山の報告に「指頭大」とあるように長さ30mmを超えるものは珍しい。これまで筆者がみた限り最大のコハクは石狩市八幡地区に所在する「若生C遺跡」の表土層から得られたコハクで長さ51mmのものだった（未報告）。ところが、2013年5月石狩川河口の左岸で最大長61mmの巨大コハクが採取（Macrowavecat現象室、2013）されて、これまでの記録が塗りかえられると同時にまれにこのような大型のものも存在することが確認できた（図9）。

コハクは北海道では古代人の主要な装身具の原材料として知られている。その利用は旧石器時代から擦文時代までみられる。そのなかで続縄文時代に大量のコハク平玉が出土することから、原産地がどこであるかという問題が長い間議論されている（青野・大島、2003）。この時期のコハク平玉は直径2cm前後であるが、なかにはそれを数千個連ねたネックレスが製作されることもある。こうしたコハクネックレスは、主に石狩低地帯以北の遺跡の墓の副葬品として出土する。しかし、これほど大量の平玉を生産できるコハク産地はどこなのであろうか。これまでコハク玉用の産地候補には石狩浜、望来浜も上げられてきたが、当時も現在の漂着状況と近似する状況であったとすれば大量の平玉を生産するのは難しい。

ただ、続縄文時代以前では量や原石形状から石

狩浜や望来の漂着コハクが装飾品として石狩川上流部へ供給されていた可能性がある。この時期石狩低地帯の遺跡では直径2cm前後で一部に自然面を残したコハクの装飾品がみられる。例えば豊富な副葬品で有名な恵庭市カリンバ遺跡（恵庭市郷土資料館，2005）の墓などのネックレスに使用されているコハク玉がその代表的なものである。自然面には漂着コハクと同様の擦痕がみられることから考えて、原材は漂着コハクであった可能性が高いと考えている。

石狩市内の遺跡でも縄文時代の石狩紅葉山49号遺跡（石橋ほか，2005），続縄文時代の紅葉山33号遺跡（石橋・清水，1984），志美遺跡（石橋ほか，1979）などからコハク原石と加工品が出土しているが（図10），これらの未加工面に砂などによる擦痕とみられる傷があり，漂着コハクの可能性が高い。

石狩紅葉山49号遺跡では石狩浜，厚田区望来浜採取の漂着コハク，サハリン島旧栄浜村採取の漂着コハクを比較試料としてコハクの産地推定（テルペン類によるGC-MS分析）が行われた。その結果，「サハリン栄浜村，厚田村望来浜，石狩市石狩浜で採取された琥珀は，地殻変動によって海底の琥珀鉱床から放出され，海岸に流れ着いた漂着琥珀である。」と結論付けられている（小笠原・原，2005）。

さらに小笠原（2005）は石狩紅葉山49号遺跡のコハク分析の結果を踏まえ，道内11遺跡出土の平玉・原石を同法で分析した。その結果は一部判別不能の資料もあったが推定された産地（鉱床）はサハリン（旧栄浜村）と分析され，「結論は，縄文遺跡出土琥珀の大部分と続縄文遺跡出土のすべての琥珀がサハリン島から渡来したというものである。以前から言われたことであるが，続縄文遺跡から大量に出土する平玉の琥珀は，議論の余地なくサハリン産であると同定された。」（小笠原前出）としている。

しかし，「(2)-1石炭」の項で述べたように岡村聡ほか（2005）による調査によると石狩浜や望来浜に漂着する石炭は石狩川上流の炭田由来である

可能性が高い。また，石狩浜や望来浜に漂着するコハクは，石炭と混在して漂着し，中にコハクが挟まれるものがあることから漂着コハクも石狩川上流の炭田起源であるといえる。

この結果から石狩紅葉山49号遺跡出土のコハクも含め道内11遺跡出土のコハクはサハリン産がほとんどという結論は導くことは困難であろう。今後，さらに調査，研究することが必要である。

### (3) アスファルト

石狩浜ではアスファルト塊が漂着していることがある。石狩市の北東部から厚田区にかけて産油層が存在する。また石狩町誌中巻二（石狩町，1991）によると石狩浜の北にある厚田区知津狩の海岸線一帯及び海中に古くから油徴が認められているという。そのことから天然アスファルトの可能性が高いと考える（図11，12）。

写真に示したアスファルトは大きい方が長さ16cmある。これら漂着アスファルトの特徴は片面が平らであり，その面に砂粒が付着している場合が多い。それから海底で産出し漂着した可能性が考えられる。

かつて石狩市域では高岡・五の沢地区，厚田区望来，生振から札幌市茨戸付近でも石油の採掘がおこなわれた。これらは石狩油田・厚田油田・茨戸油田などと呼ばれている。石狩油田の発見は幕末期に遡り，その発端は海上に油が浮くのをみて探鉱し山中で発見されたと伝えられている（石狩町，1985）。

考古学的に遺物としてのアスファルトは全道の遺跡から出土する。阿部千春の教示によると北海道内のアスファルト塊，付着遺物を出土した遺跡は46遺跡あり，年代は縄文前期から同晩期に集中しているという（阿部，私信）。

アスファルトの産地分析では北海道南部のものは東北地方（秋田県）の産油地のアスファルトで，また石狩低地帯の遺跡ではサハリン産のアスファルトや新潟産のアスファルトが持ち込まれているという分析結果がでている（小笠原・阿部，2007）。アスファルトの使用法は矢柄と矢じりを



図8. 石狩浜に漂着した最大級の石炭.



図10. 若生C遺跡のコハクと漂着コハク.



図9. 石狩浜で最大級の漂着コハク (Macrowavecat, 2013) .



図11. アスファルトの漂着状況 (石狩浜) .



図12. 石狩浜に漂着したアスファルト塊.

固定させる接着剤や土器の割れ目などを補修する充填剤に使用される。

石狩市内でも志美遺跡（石狩町教育員会，1979）では石製のやじりに根元に付着している例が見られ，また紅葉山33号遺跡（石狩町教育員会，1984）ではG P 57墓のなかに塊が石器類と共に置かれていた，また土器の割れ目の補修例としては上花畔1遺跡（石狩町教育員会，1992）がある。

石狩浜に漂着するアスファルト塊が本当に天然アスファルトで流出源がどこであるか早急に調べる必要が，厚田区望来沖とすれば分析の必要があらう。

#### （4）白樺浮き

白樺浮きとはカンバ類の樹皮を筒状にしたもので，形態から漁撈具の浮きであろうと推定されてきた。石狩浜だけでなく日本列島の日本海側沿岸に漂着する。ビーチコーマーの間ではよく知られた存在であったが，最近まで浮きらしいというだけで，正体が不明な漂着物であった（図13）。

ところがここ数年，日本海沿岸各地や石狩浜でも確認されているが，筒穴の部分に紐が通ったものや漁網に付けられた状態のものが漂着し，漁撈用の浮きであることが確認された。しかし依然としてこの浮きがどこから来るのか明らかになっていない。カンバ類の樹皮を加工したものであり，少なくとも日本国内での使用例は知られていない。沿海州あるいは朝鮮半島の伝統的漁法で使用されているのではないかと推測されているが（鈴木，2006），具体例は不明である。

このように漂着する白樺浮き自体は現代の物であるが，カンバ類の樹皮を用いた遺物は縄文時代からアイヌ文化にいたるまでみられる。また白樺浮きではないが江戸時代には樹皮製浮きが漂着し採取された記録が残っているので以下に紹介する。

北海道の遺跡からもカンバ類樹皮を筒状にした遺物が出土する。石狩市内では石狩紅葉山49号遺跡（石橋・西方，2005）で2点，千歳市美々8遺

跡（田口・鈴木，1997）ではアイヌ文化期とみられる出土品のなかに白樺浮き同様の製品がみられる。ただこれらの用途については，漁撈用かどうか特定されていない。

また松浦武四郎（松浦，1862）の天塩日記で天塩地方の海岸でみた漂着物のなかに樹皮製浮きがあることを記している（図14）。その説明に「浮兒ユロクンクルメノコアハ 黄檗の皮忒枚か三枚合せ作りしものなり，西北の海辺に時々寄るもの也。是黒龍江辺の網の浮子なるべし。また權も長四尺位流れ来る事有る也」とある。当時はこの



図13. 石狩浜に漂着した白樺浮き。



図14. 天塩日誌掲載の漂着浮き。

ような形の浮きもあったことが伺える。また、外国から流れ付いた漂着物は当時から人々の注意をひいていたことも分かり、興味深い事例であるので紹介した。

### (5) 銭貨

石狩浜では現代の硬貨を含む銭貨が漂着する。これまでも銭貨の存在は気づいていたが、積極的に採取することはなかった。しかし2013年4月5日、石狩浜海水浴場西端で加工痕跡をもつ特異な寛永通寶を採集した(図15)。これが契機で寛永通寶など漂着古銭がないか、あるいは現代の銭貨も含め石狩浜でどの程度の銭貨の漂着があるのか知るため積極的採取を行った。

採取期間は、2013年4月から6月末、10月の4カ月間の延べ22日採取で合計244枚の銭貨が採集された。内訳は表1のとおりである。

このうち米国10セント硬貨及び昭和・平成の銭貨は海水浴場の海の家のある前浜に集中しており、これらのほとんどは海水浴客が落とした可能性が高いと考えられる。なお、1円硬貨は1枚も採取されていない。この理由はアルミ製で軽量のため風に吹き飛ばされた可能性が高い。

また、海水浴場付近を含め石狩浜全体では戦前の硬貨はほとんど採取できていない。例外は明治16年発行の1厘硬貨1枚のみで河口近くで採取されたものである。

石狩浜海水浴場の開設は大正から昭和初期とみられ(工藤, 2012), この時期の硬貨が見られな

いのは、汀線が今より内陸にあったのが原因と思われる。

#### (5)-1. 市内出土の近世銭貨と漂着寛永通寶の特徴

表のとおり、2013年では2枚の寛永通寶を採取された。場所は海水浴場西端と石狩川河口近くである。寛永通寶はこれまでも2007年6月に筆者そして2008年には工藤友紀さんが河口から1kmほど離れたところで採取していて、石狩浜で採取された寛永通寶は合計4枚ある。

この銭貨は初鑄が寛永3(1626)年初鑄で、一文銭、四文銭、材質は銅、鉄、真鍮がある。万治2(1659)年までに作られたものを「古寛永」、寛文8(1668)年以降に作られたものを「新寛永」と呼ぶ。

寛永通寶は近世の銭であるが明治期になっても通用した貨幣である。このため、可能性としては現代人が落とした可能性もあるが、河口から約3.5kmの間に散在し、石狩浜に漂着する陶磁器片など同じく流出場所は石狩本町市街地に求められる。

寛永通寶等の近世銭貨は本町市街地などでも採取されている。参考まで市内の出土一覧を表2に示した。

2013年4月5日、筆者が採取した特異な寛永通寶とは次のようなものである。

新寛永で材質は銅銭で、発見当初は鍍で覆われて確認できなかったが「寶」の字の下側に直径2.5mmの円形の孔が開けられていた。小孔は裏面から表面へ向け錐のようなものをあて、たたいて開けたとみられる。

このような二次的な加工を施した銭貨を「加工銭」と呼ぶが、筆者はこれまで寛永通寶の例は知らなかった。そのため、数人の研究者に問い合わせた結果、当該資料は「加工銭」として良いのではないかと思われた。

また、関根達人(私信)によると寛永通寶の加工銭は千歳市美々8遺跡にあるというご教示を頂いた。

表1. 2013年石狩浜採取の銭貨.

銭種	時期	数量
寛永通寶	江戸時代 (新寛永)	2枚
1厘硬貨	明治時代 (明治16年発行)	1枚
5円・10円・50円・ 100円・500円硬貨	昭和・平成時代	240枚
10セント硬貨	1965年以降	1枚

## (5)-2. 道内の加工銭について

鈴木信（2001）によれば北海道における加工銭の例は函館市志海苔町の「北海道志海苔中世遺構出土銭」を最古例に上ノ国町勝山館，千歳市末広遺跡，平取町ユオイチャシ，札幌市N19遺跡，千歳市美々8遺跡の6遺跡があるという。さらに加工銭にはア類からウ類の3種の基本タイプがあり，細分すると全部で9種類になるという。このうち函館市北海道志海苔中世遺構では基本タイプ全ての加工銭があるとしている。参考にその代表的なものを示した（図16）。

道内の寛永通寶出土遺跡の調査報告書を調べてみると寛永通寶の加工銭と思われるものは別海町の「野付通行屋遺跡」（石渡，2007）にあることがわかった。この加工銭も小孔が1個で石狩浜のものと同じタイプのものであった（図17）。この遺跡は寛政11（1799）年から安政3（1856）年ごろまで存続した通行屋（公的な宿）で，根室，厚岸，標津，目梨への通行の要衝で，和人の番人のほか舟などを動かすため8人前後のアイヌ人が働いていたという。

鈴木（前掲）の分類に従えば，石狩浜で採集した寛永通寶は孔が1個のみであるからイ類の「イ2」にあたる。また，野付通行屋遺跡，美々8遺跡もこのタイプに分類され，現時点では北海道内においては寛永通寶の加工銭はこのタイプしか

ないことになる。

ところでイ2タイプの加工銭は北海道の最古例は志海苔中世遺構であり，それ以降の年代順に並べると勝山館，美々8遺跡（15世紀中葉～15世紀），N19遺跡（16世紀から18世紀），野付通行屋遺跡（寛政11（1799）年から安政3（1856）年），石狩浜（幕末期？）の順となろう。

またイ2タイプの加工銭は東北地方にもあり，青森県蓬田村蓬田，秋田県能代市浄明寺，山形県櫛引町東荒屋で1～2枚出土している。山形県の例は14世紀代と考えられ，鈴木信はイ2タイプの起源は本州＝和人の文化伝統にあると考えている。また，今のところ寛永通寶のイ2タイプの加工銭は東北地方でもほとんどないようである。このように管見の限りではあるが北海道においては美々8遺跡，野付通行屋遺跡，石狩浜の3例しか存在していないこととなる。

寛永通寶も含め加工銭がどのような性格のものか良く分かっていない。また北海道においては誰が（和人かアイヌか），所持していたかが問題になろう。

こうした点については今後の研究課題であるが，美々8遺跡の寛永通寶は「灰集中10」から出土しており，アイヌの送り儀礼にともなう可能性がある。報告者は，針入れ（チシポ）の蓋に使用されていた可能性を考えている（田口・鈴木，

表2. 石狩市内の近世銭貨の出土一覧。

場 所	銭貨名	加工形態	出土形態	備 考
金竜寺裏	一分金？	無	表採・畑	伝聞
八幡神社前	寛永通寶（古）	無	表採	2013
石狩浜	寛永通寶（新）	無	表採	2007
石狩浜	寛永通寶（古）	無	表採	2008
石狩浜	寛永通寶（新）	イ2	表採	2013
石狩浜	寛永通寶（新）	無	表採	2013
多田遺跡(厚田区古潭)	寛永通寶（新）	無	和人墓	(著者不明, 1972)
志美第1遺跡	寛永通寶（新）	無	表土2点	1979未報告



図15. 石狩浜で採取した寛永通寶（直径25.5mm）.  
A：発見時.  
B：表面.  
C：裏面.

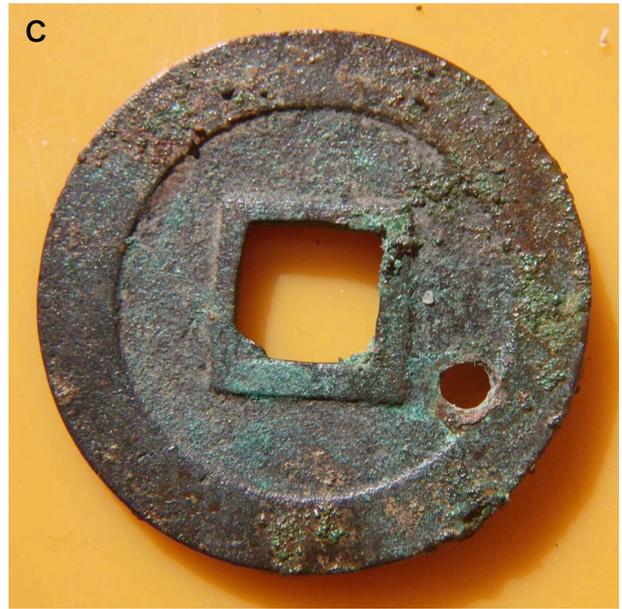


図16. 函館市北海道志海苔中世遺構の加工銭（市立函館博物館提供）.



図17. 野付通行屋遺跡出土の寛永通寶加工銭.



図18. 美々8遺跡出土の寛永通寶加工銭.  
(広財 北海道立埋文センター提供)



図19. 札幌市N19遺跡出土の開元通寶加工銭. A：表面. B：裏面.

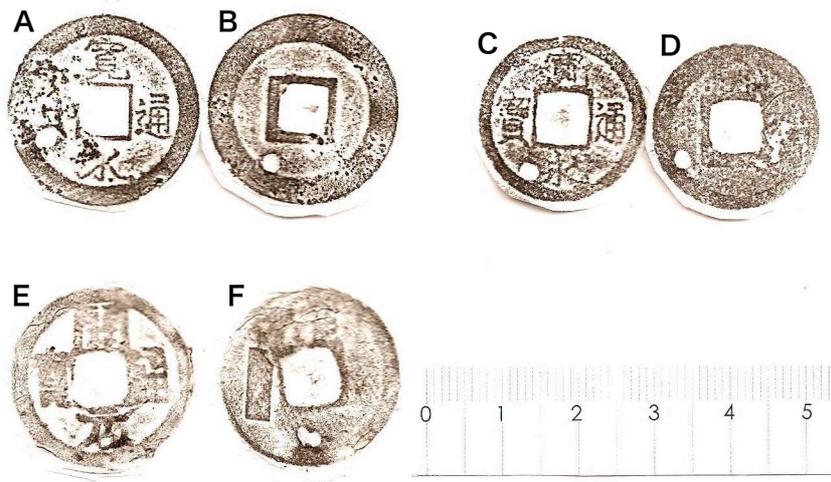


図20. 加工銭拓影図. A-B：石狩浜, C-D：野付通行屋遺跡, E-F：札幌市N19遺跡.

1997) . この確認は難しいが、出土状態から考えるとアイヌが所持していた加工銭と考えてよい(図18) .

また寛永通寶ではないが、札幌市N19遺跡の加工銭(開元通寶)は、アイヌ墳墓(第1号墳墓)に伴うものであり、所持していた人はアイヌであるといえる(河野, 1933; 高倉, 1933) . この資料は現在北海道大学フィールド科学センター植物園・博物館に所蔵されている。すでに河野・高倉に報告されているとおり、ガラス玉とともに首飾りの一部を構成していたものとみられる(図19) .

調査したところ、加工銭の孔の内部が磨滅しており、首飾りとして使用される以前に小孔に糸などを通していたことが推測された。おそらくこの加工銭は首飾り一部となる前、別の形で使用されていた時期があったと考えられる。

石狩浜の加工銭は漂着物であり、二次的な資料であるが、流出源が石狩本町市街地の可能性が高く、近世末とみられる。当時ここにも出稼ぎのためアイヌがおり、彼らの所有だった可能性が考えられる(図20) .

### (5)-3. サハリンの加工銭との比較

また以下に述べるサハリンの例は銭貨の種類は異なるもののイ2の使用法を考える上で参考となる事例がある。

三宅俊彦(2013)によるとサハリン州郷土誌博物館とティモスコフ市立博物館、ポロナイスク郷土誌博物館、ノグリキ市立博物館所蔵の清朝銭にイ2タイプの加工がみられる。サハリンでのこのタイプの加工銭は銀銭であることが多いらしい。また加工銭の使用者はこの地域の少数民族で、加工銭は衣服などに縫いつけ装飾あるいは魔除けとするためと考えられている(三宅前掲) .

サハリンでは清朝銭と寛永通寶の分布域が異なるようであり、また銀銭、卑金属貨という価値あるいは材質的な違いにその理由が求められる可能性もあるが、サハリンと北海道にイ2タイプの加工銭がほぼ同時期に存在するのは注目される。この

ようなサハリンでのイ2タイプの使用例を参考にすると札幌市N19遺跡も含め、美々8遺跡、別海町野付通行屋遺跡、石狩浜のイ2の寛永通寶加工銭は、アイヌが所持し服などに装飾として使用していた可能性が考えられる。ただ、今のところ民俗例ではこのような例は知られていない。

**謝辞:** 執筆するにあたり次の機関、個人にご教示と調査のご協力を得たので記して感謝申し上げる。

福岡市埋蔵文化財センター、福岡市博物館、北海道大学フィールド科学センター植物園・博物館、(広財)北海道立埋蔵文化財センター、市立函館博物館、別海町郷土資料館、余市町水産博物館、阿部千春、荒山千恵、石渡一人、小川康和、加藤 克、河村好光、工藤友紀、倉橋直孝、斉藤譲一、志賀健司、鈴木明彦、関根達人、田口尚、中村和之、野村祐一(敬称略)

### 引用文献

- 青野友哉・大島直行, 2003. 恵山文化と交易. 新北海道の古代2 続縄文・オホーツク文化. 北海道新聞社, 10-29.
- 恵庭市郷土資料館, 2005. カリンバ遺跡.
- 濱田誠・菅和哉, 1998. 石狩湾奥砂浜に見られる近年の海岸変化. 地下資源調査所報告, 69: 29-42.
- hyoutyakubututen, 2009. 北海道大漂着展 図録ブログ. <http://hyoutyaku.exblog.jp/>
- 石橋孝夫・清水雅男・藤田登・田才雅彦, 1979. 石狩湾新港地域開発区域埋蔵文化財発掘調査報告 SHIBISHIUSU II. 石狩町教育委員会.
- 石橋孝夫・清水雅男, 1984. 紅葉山33号遺跡発掘調査報告書. 石狩町教育委員会.
- 石橋孝夫・工藤義衛・西方麻由 編, 2005. 石狩紅葉山49号遺跡. 石狩市教育委員会.
- 石狩町, 1972. 石狩町誌. 石狩町.
- 石狩町, 1985. 石狩町誌中巻一 石狩町.
- 石狩町, 1991. 石狩町誌中巻二 石狩町.
- 石狩町教育委員会, 1979. SHIBISHIUSU II. 石狩町教育委員会.
- 石狩町教育委員会, 1992. 石狩市上花畔地区宅地開発に伴う埋蔵文化財調査報告. 石狩市教育委員会.
- 石狩町教育委員会, 1984. 紅葉山33号遺跡. 石狩町教育

- 委員会。
- 石川治, 2013. GPSロガーを用いた石狩川河口砂嘴の地形変化の調査. いしかり砂丘の風資料館紀要, 3:43-53.
- 石渡一人, 2007. 野付通行屋跡遺跡Ⅱ, 別海町教育員会.
- 垣見俊弘, 1958. 5万分の1地質図幅説明書. 地質調査所.
- 笠原潔, 2004. 埋もれた楽器. 春秋社.
- 河野広道, 1933. 発寒村の遺跡発掘記. 蝦夷往来10. 164-168.
- 工藤義衛, 2012. 石狩浜の歴史. はまなす×いそこもりぐも@石狩浜. 藤女子大学人間生活学部.
- 町田利幸, 2005. ココヤシ製笛. 原の辻遺跡 総集編Ⅰ 原の辻遺跡調査事務所調査報告第30集. 長崎県教育員会.
- Macrowavecat, 2013. Macrowavecat現像室. <http://ameblo.jp/macrowavecat/>
- 松浦武四郎, 1862. 天塩日誌全. 札幌市中央図書館デジタルライブラリー.
- 三宅俊彦, 2013. サハリン出土の銭貨. 北海道総合博物館研究報告, 6:66-85.
- 奈良市埋蔵文化財センター, 2003. 古代の井戸からココヤシの実. 奈良市埋蔵文化センター速報展示資料 No.16
- 小笠原正明・原奈々絵, 2005. 石狩紅葉山49号遺跡出土琥珀の産地推定. 石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書.
- 小笠原正明, 2005. 化学分析による遺跡出土アスファルト等の産地推定. 日本文化財科学会第22回大会研究要旨集, 18-23.
- 小笠原正明・阿部千春, 2007. 天然アスファルトの利  
用と供給. 縄文時代の考古学6 ものづくりー道具製作の技術と組織ー. 同成社.
- 岡村聡・田中沙織・門馬弥生・菅原香菜子, 2005. 石狩湾厚田海岸に打ち寄せる石炭の起源. 環境教育研究8:19-26.
- 大嶋和雄・横田節哉, 1978. 北海道石狩湾の堆積物. 地質調査所月報, 29(8):1-29.
- 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳 訳註, 1994. 和漢三才図会16. 平凡社.
- 篠宮正, 2009. 玉津田中遺跡出土ココヤシ考. 兵庫発信の考古学. 真壁葎子先生喜寿記念論文集刊行会. 201-207.
- 杉村順夫・松井宣也, 1998. ココヤシの恵み. 裳華房.
- 鈴木明彦, 2006. 北海道の漂着物. 北海道教育大学海岸生物研究会.
- 鈴木信, 2001. 3北海道の中世出土銭. 千歳市ユカンボシC15遺跡(4)北埋調報159. (財)北海道埋蔵文化財センター.
- 田口尚・鈴木信編著, 1997. 美沢川流域の遺跡群XX 北埋調報114. (財)北海道埋蔵文化財センター.
- 高倉新一郎, 1933. 発寒村発掘の遺物に就いて. 蝦夷往来, 10. 169-175.
- 玉虫左太夫, 1992. 入北記. 秋場一郎解説. 北海道出版企画センター.
- 谷内鴻・藤村久和・鈴木藤吉・木滑二郎 編, 1969. 厚田村史. 厚田村.
- 横山壮次郎, 1889. 北海道ノ琥珀及建築材. 地学雑誌, 1(3):113-114.
- 著者不明, 1972. 北海道厚田村墓地. 考古学年報, 20:164.